

渋谷からプラネタリウムが消える日

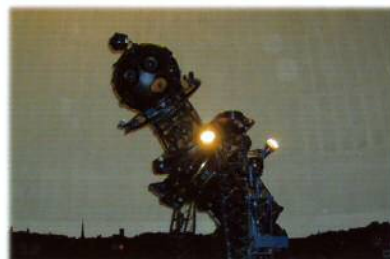


ある日友人のかずくんは何気にTELしてみると『五島プラネタリウムが閉館になるから最後に観に行かないか』と言う。前から噂では聞いていたが、いよいよ44年間のその幕を閉じることが決定的になったらしい。閉館の数日前、プラネタリウムのある渋谷・東急文化会館へ行ってみると、入場券を買うための長い列が8階から2階の入り口まで延びていた。

プラネタリウムが青春の思い出のひとつとなるのか中年層の観客が多い。平日なのに男性客も目に付く。入場者数の減少から閉館に追い込まれたことを思うと、この賑わいがプラネタリウムの最後をより強調しているようでちょっと淋しくなる。20代の8年間、この街に通勤していた頃とこのビルは何も変わっていないように見える。プラネタリウムと数軒の映画館、飲食店、ショッピングモール、当時としては新しかったであろうに今ではすっかり渋谷の中心は若い人が集まるセンター街に流れてしまったのだろう。



駅前だというのにさびれた雰囲気があるのは『文化プロムナード』『文化特選街』などの懐かしさを思わせるネーミングがそのまま残っているからかもしれない。当時一階のユーハイムではよく芸能人をみかけた。奇麗で広々とした空間を感じさせる喫茶店というのはまだ珍しかったからだろうか。五島プラネタリウムの投影機はドイツのカール・ツァイス社で1956年に製造された4型という形式の第1号機。最近の投影機がコンピューターのプログラムによって作動するのに対し40年以上前に作られたこの機械は手動式なのだそう。プラネタリウムの解説員は4名で、それぞれが順番で台本もない解説を1時間こなし、手動式の投影機の操作も併せて行うということだ。生解説だからこその観客とのやりとりも大きな魅力のひとつだったように思える。『時代は流れ渋谷の街も様変わりしていく。それを見守り続けることはできなくなってしまったが、星空への興味は失くさないで欲しい』といった解説員さんの話にちょっと胸がキュンとなる。今ではプラネタリウムも全天周映画を見せたり娯楽性の高いものが喜ばれるようだが、そんな中で一貫して教育施設としての姿勢を守り続けたことには敬意を表したい。



映写が終わって振り返った投影機はまるでエヴァンゲリオンが咆哮しているように見えた。